

入院第9日目 ナースをなんぱするには

入院10日目—ぞろぞろ

入院11日目—めんこいナース

ここに書かれたいくつかのギャグと言えるものがあるとすれば、それは比較的古典落語に負っている部分がある。たとえば「ぞろぞろ」はそのままの名前の落語があり、草鞋が主役である。

6

入院第9日目

3階の検査棟で一人検査待ちをしていた（という事は車椅子でナースの付き添いがなくなっているということ）。ここはグレーの絨毯を敷き詰めた広々とした廊下が同時に待合室になっており、ぽつんぽつんとソファが置いてある。そして静かなクラシック音楽が流れている。すると突然、昨夜大家ナースが取り替えて行った「輸液セット」がなぜかピピーピピーと鳴り始めた。ぼくは24時間点滴を受けているので、どこへ行くのにも、トイレに入るのにもこの点滴スタンドを引きつれて移動している。するとどこからともなくこの検査棟専属のナースやぼくの病棟の北ナースまでうじゃうじゃと飛んできた。ぼくはひどく感動して、言った。「ナースという種族はこの音に敏感に反応するよう条件付けられているんだ。」「そうで—す」という答えがいつせいに返ってきたので、「じゃ、渋谷とか六本木でナースをなんぱしようと思えば、この音を発すればいいんだ」というと「病院の外では、この音からできるだけ逃げるように条件付けられているんです」

入院第10日目

洗濯機の洗濯槽のなかを何気なく覗いていた。この何気なくというところがポイントだ。そこへ、一昨日ぼくが嫌われた大家ナースが通りかかった。今日は彼女はぼくを担当していないので気を許したか、油断をしたか、「あ、ヒマ岡さんだ」と言って寄ってきた。そしてぼくにつられて何気なく洗濯槽の中を覗きこんだ。ちょうどその時、水槽の底のほうから回転しながらぼくの黒い下着のパンツが上ってきた。大家ナースはつぶやいた。「いっけねえ。わたしまで覗いてしまった」ぼくはすかさず、その水もしたたるパンツをつまみ上げて、彼女の前にぶらぶらさせ、「見たって減るもんじゃねえ」彼女は、顔をそむけて手を横に振って、「私が見ると増えてしまいます」

と吐きそうな顔をした。

「今夜、君の夢の中に出るぞ。君のベッドの天井から、ぼくの黒い下着のパンツがぞろぞろ、ぞろぞろ・・・」

「もう、島岡さんの担当にはなりませんっ」と言い残したままドストドス去って行った。またしても嫌われてしまった。

入院第11日目

ぼくのベッドまで食事を配膳してくれるとってもキュートなナースがいる。花光という珍しい姓を持っている。「ハナミツ」と呼ぶのだそうだ。「変わった姓を持っていると、わざわざ変な呼び方をされたりするよね。何か言われなかった?」「鼻水って呼ばれたりします」「鼻水? ひどい。いや、それにしてもきれいな名前だね」ぼくはこのナースの名前を誉めて自分を売り込んだ。花光ナースは顔に似合わず、がっはっはっはと豪快に笑ってくれるので、気に入っている。今日の昼食時に花光ナースは元気よくやってきて、「島岡さん。今日はバンバン麺ですよ。わたしこれってだーい好きなんですよ」と力をこめる。「君は麺類が好きなんだ」「はい、ダイダイ大好きです」「大好きぐらいじゃまだまだ甘いな」「えっ? あまいですか?」「ぼくなんか人類から進化して麺類の域に達している」というと、思いのほか、お腹をよじらせてがっはっはっはと笑ってくれた。「じゃ、島岡さんは自分自身を食べているんですか?」「花光さんはめんこい。ぼくはめんくい」「がっはっはっは。うまい!!! うまいな、島岡さんは。座布団一枚。と言いたいけど、ここは病院だから枕一個」持ってきてくれた枕に痛い足を乗せて寝ているぼくであった。

